

温泉地の活性化

浦 達 雄

I はじめに

1. 研究の背景

日本の温泉地は、高度経済成長期における観光の大衆化・大量化・広域化によって、大きく変貌を遂げたのは周知の事実であろう。旅館数の増加はもちろんのこと、旅館規模の拡大も進展した。例えば、別府八湯（別府市）の旅館数は1967年10月に939軒に達し、ピーク時を迎えたのである（浦 2006）。こうした中で、意欲的な業者は広域観光の宿泊拠点を目指して大規模な観光旅館を開発し、規模の拡大・デラックス化を行ったのである。その結果、別府市観海寺温泉の杉乃井ホテルのように、客室数は592室、収容人員は2,636人の日本最大規模の温泉旅館が出現するに至った（温泉観光士養成講座実行委員会編 2013）。

1973年の石油ショック以降、日本の旅行形態は大きく変化した。つまり、団体旅行の減少・家族やグループ客の増加傾向である。バブル経済の崩壊やデフレ経済の進行など、温泉地を取り巻く環境は年々厳しくなり、2011年3月11日の東日本大震災の追い打ちもあって、温泉地域社会の崩壊、限界集落化に直面するところも出現している。

現在、温泉地の最大の課題は温泉地の停滞・疲弊である。温泉地の疲弊は景気の停滞・不況・デフレ経済の影響・温泉旅館による囲い込み戦略など、その原因は様々である。

一方、21世紀に入って温泉地の再生や再活性化が話題となっている。安定経済成長期以降、由布院・黒川などの温泉地が活性化に成功し、それぞれ山の温泉地のあり方について方向性を示すことになった（浦達雄 2010）。黒川は元々湯治場で、高度経済成長期で一時期観光化したのが、その後停滞した。そこで、1986年、黒川は入湯手形による露天風呂巡りを導入することで、客室稼働率アップという経営革新が進んだのである。

さて、昨今、大型の温泉旅館の倒産と旅館再生企業の進出とが一体となって、マスメディアを賑わしている。とある温泉地では倒産した旅館がそのまま放置され、こうした中で旅館再生企業による温泉旅館が繁栄している様は異常だと思いたい。

ここでは、温泉地の活性化について研究テーマを設定したい。これまでの筆者の経験をもとに、温泉地の活性化について私論を展開し、今後の温泉地のあり方や方向性について問うことは意義深いと判断し、研究のテーマを設定することにした。

2. 研究の目的と方法

研究の目的は、温泉地の活性化について全国的な傾向そして活性化の取り組み事例（石川県和倉温泉・珠洲温泉）を通して、具体的な提案を行うことである。筆者は、この20数年間、200軒を超える小規模な温泉旅館を対象として、経営者への聞き取り調査を実施し、その際、温泉地の状況を把握してきた。例えば、浅虫（青森県）・湯村（山梨県）・浅間（長野県）・和倉（石川県）・城崎（兵庫県）・黒川（熊本県）・由布院（大分県）・別府（大分県）などは長年に

わたって観察を続けている。こうした経験や体験などをもとに、温泉地の活性化について私論を展開したい。

温泉地の活性化に関する研究は、観光地理学の分野では極めて多い。その代表例は山村順次による研究成果である（山村 1998）。山村は全国の温泉地を体系的に整理した上で、多様な温泉地を事例として活性化を提案した。その他では、布山裕一の研究成果がある。布山は全国の温泉地を事例として活性化の方向性を明示した（布山 2009）。浦達雄は別府温泉郷を事例として活性化の方向性を提案した（浦 2006）。さらに温泉旅館の活性化についても報告している（浦 2012）。

II 温泉地の動向

1. 全国的な傾向

図は温泉地の年度別変化を示したものである。環境省では、宿泊施設のある温泉地を1つの温泉地として数えているが、環境省のデータ¹⁾によると、日本における温泉地数は、2011年度で3,108カ所を数える。当データによると、1962年度は1,518カ所であり、その伸びは2.05倍に対してはいる。参考までに、宿泊施設は9,244軒⇒13,754軒、同収容定員は500,445人⇒1,394,107人と増加し、伸び率は1.49倍、2.79倍となる。

温泉地は1978年度で2,012カ所を数え、2,000カ所を突破した。その後、1995年度で2,508カ所と2,500カ所を超え、2001年度で3,023カ所と3,000カ所を超えた。2002年度以降は3,100カ所台を推移しており、2009年度で3,170カ所とピークを迎えたが、その後、伸び悩んでいる。

一方、日帰り温泉（温泉利用の公衆浴場数）は増加傾向にあり、2011年度で7,902カ所を数える。これは掘削深度1,000mを超える大都市の大深度温泉が大いに関係している。

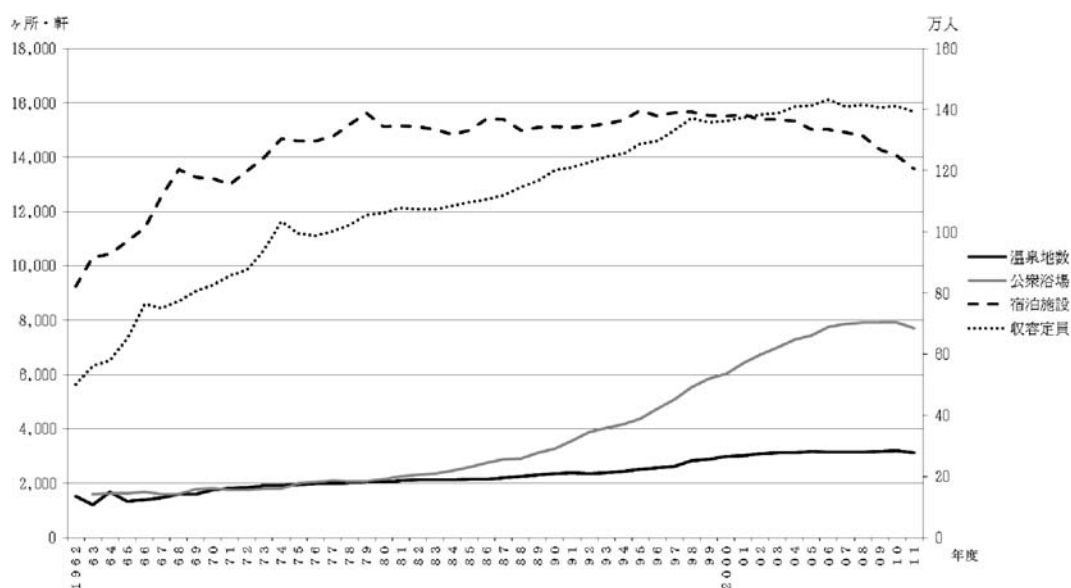


図 日本における温泉地・公衆浴場・宿泊施設・収容定員の推移
 (注) 環境省の温泉統計により小堀貴亮作成。

2. 癒し系・秘湯系が人気

ところで、温泉地は3,000カ所を超え、成熟期に入ったと言えるが、温泉地において明暗が顕在化してきた。つまり、旧来型の温泉地の停滞と、秘湯・癒し系の温泉地の健闘である。前者は団体客の減少で温泉地としての機能が停滞し、温泉情緒を失いつつある。さらに、時代の変化を読みきれない旧態依然とした経営体質があり、夢よもう一度（高度経済成長期の夢）、つまり、いまだに団体志向・宴会志向を目指している。

これに対して、癒し系・秘湯系の温泉地は健闘している。こうした温泉地は高度経済成長期の開発に取り残された温泉地で、交通が不便で、団体客も立ち寄らず、安定成長期以降に注目を浴びた温泉地である。その大半が小規模旅館の多い温泉地で、源泉旅館の割合が高いと言われている。

癒し系の温泉地としては乳頭（秋田県）・黒川（熊本県）・由布院（大分県）など、秘湯系の温泉地としては酸ヶ湯（青森県）・白骨（長野県）などがあげられよう。

国民保養温泉地は、本物の温泉と自然環境を生かした温泉地で、最初は1954年10月11日に酸ヶ湯（青森県）・日光湯元（栃木県）・四万（群馬県）が指定され、2013年までに91カ所が指定されている。現在の癒し系・秘湯系の温泉地の大半が国民保養温泉地である。

3. まちづかい型のまちづくり

由布院の活性化以降、温泉地の再生や地域活性化に取り組む温泉地が各地で登場している。それまでの温泉地は「旅館づくり」はあっても、「まちづくり」は無かったと揶揄されている。確かにハード面の開発を優先し、ソフト面の開発がこれに次いだと言えよう。

現在の温泉地の活性化は「観光開発」よりも「地域づくり」が主体で、地域資源（自然・歴史・産業・文化）の有効活用が効果的とされている。具体的には由布院の場合は田園風景、黒川の場合は山の風景の活用である。つまり「在るものを活かす」という「まちづかい型」の「まちづくり」が市民権を得るようになってきた。ハード&ソフトの整備を克服し、ハード（アイデアや精神）を活かした温泉地づくりがいま求められている。

4. 温泉ブームの背景

温泉ブームの背景として、マスメディア（特にテレビ）の果たした役割は大きい。高度経済成長期における温泉観光は男性主体の団体客が多かったが、20世紀後半からの温泉ブームでは若者や家族・女性グループが温泉浴を楽しむようになった。

テレビ番組では、旅情ミステリー・露天風呂殺人事件・若い女性の露天風呂入浴シーンなどが登場し、温泉旅行の新たな動機付けを行った。さらには温泉旅館大賞（TBS系）・不振旅館の改造番組・女将さん奮闘記などが登場し、視聴者の話題となった。

ところで、竹下登内閣による「ふるさと創生事業」は地方の温泉開発に影響をもたらした。同事業は1988～1989年に行われ、市町村へ1億円の交付が行われた。その結果、全国3,081市町村の内、354市町村が温泉掘削を実施したのである（温泉観光士養成講座実行委員会編2013）。

Ⅲ 温泉地の活性化への取り組み事例

1. 和倉温泉

(1) 和倉温泉の現状

2007年3月、能登半島地震で和倉温泉の観光産業は大きな痛手を受け、さらに2008年9月のリーマンショックによる世界経済の悪化と相まって、入込客数はピーク時の1991年の160万人から2010年には88万人となった(浦 2013 a)。

そこで、2008年4月から官民一体となって、和倉温泉の活性化、つまりまちづくりに取り組むことになった。事業期間は5年間で、総事業費は17億円となる。その結果、2010年4月には弁天崎源泉公園(写真1)、2010年9月には多目的グラウンド(和倉温泉運動公園の一部)、2011年4月には総湯館(写真2)、2011年11月にはヨットハーバー(和倉温泉運動公園の一部)などが完成した。

ところで、2011年6月11日、能登の里山里海が世界農業遺産に認定された。さらに2013年3月31日正午、能登有料道路は「のと里山海道」となって無料開放が行われた。そして、2015年春、北陸新幹線は金沢まで開通することが確定している。こうした社会経済環境の変化は、和倉温泉にとっては好材料だが、他力本願ではなく、とにかく自力で持続可能な温泉地を常に求める必要がある。

石川県の主要観光地の入込客数(2012年度)は表に示す通りである。和倉は85.3万人で、対前年比はマイナス7.4%に減少した。これに対して、輪島温泉郷は13.8万人とはいえ、対前年比プラス1.5%であり、世界農業遺産の効果は少しだけ出ていると思われる。

2013年4月現在、和倉の旅館数(組合加入数)は21軒を数える。1981年に39軒、1996年に31軒を数えたが、減少傾向を示している。和倉と言えば加賀屋の和倉と言われるが、老舗の温泉地だけあって、個性的な温泉旅館が多い。とはいえ、倒産した金波荘を買収した湯快リゾートが2010年4月28日に再生開業を果たした。宿泊料金は年間を通じて同一料金の1泊2食7,800円とし、和倉温泉では最も低価格となり、問題を投げかけている。

(2) 旅行商品としての和倉温泉

東京の旅行会社でパンフレット(春・夏)をみると、北陸方面のツアーは実に少ない。タイトルの一例は「金沢 北陸 富山 石川 福井」、サブタイトルには「金沢城・石川門 五箇



写真1 総湯(和倉温泉)



写真2 涌浦之湯壺(和倉温泉)

表 石川県における観光入込客数

形態	温泉地・観光地	2012年 (千人)	増減率 (%)	2011年 (千人)
主要温泉地	山中温泉	478	▲9.3	527
	山代温泉	877	▲5.1	924
	片山津温泉	510	▲1.5	518
	粟津温泉	285	▲5.6	302
	湯涌温泉	59	▲4.8	62
	和倉温泉	853	▲7.4	921
	輪島温泉郷	138	1.5	136
主要観光地	兼六園	1,705	10.9	1,537
	(同上・外国人)	114	48.1	77
	いしかわ動物園	316	▲1.9	322
	輪島朝市	644	▲3.6	668
	のとじま水族館	417	▲12.0	474
金沢市内主要8ホテル		549	16.6	471

(注) 北陸中日新聞 2013年4月19日付の記事による。

山 東尋坊 兼六園 加賀温泉郷 富山湾鮎」とあり、和倉は登場しない。とはいえ、金沢と能登半島を巡るツアーでは和倉が宿泊地で、1泊2日で和倉に訪問するツアーも散見される。和倉では着地型観光としてのミニ観光バスも用意され、目的地は七尾市街地・能登島となっている。

パンフレットには、和倉温泉スイーツめぐり(4月1日～9月30日)・能登よさこい祭り(6月7日～9日)・わくわく夏祭り・ナイトクルージング(7月27日～8月25日)・和倉温泉夏花火大会(8月1日)・カブトムシGET&自然ふれあい体操(7月26日～8月18日)などが記載され、女性や家族を意識した姿勢が読み取れよう。

(3) スロートーリズムの拠点を目指して

近年の和倉は和倉温泉運動公園を整備することで、七尾湾を意識したヨットレースなどマリンスポーツを取り入れたスポーツ観光の推進を意図している。

以下、和倉の今後の方向性について、すぐに出来ることを3点だけ明示したい。

① ロングステイ観光の推進

学生の合宿を意識したスポーツ観光も大切だが、一般客に対して、温泉を最大限活かした癒しの場を提供し、少なくとも4泊するロングステイ観光を推進すべきである。そのためには、4泊5日の滞在メニューやモデルコースを提案し、きめ細かな案内をしないといけない。七尾市街地・能登島・奥能登コースなど、和倉温泉の旅館で荷物を置いたまま出かけるパターンである。当面は自家用車利用となるが、公共交通機関を利用したコースも作る必要がある。

② スロートーリズムの体験

スロートーリズムは観光地でスローライフを楽しむ形態である。地産地消がテーマで、観光客は地元の食材を活用した料理を食することになる。幸い能登の里山里海は世界農業遺産に認定され、ブランド力が増している。旅館料理に大いに活用しなければならない。

③ 毎日の情報発信

情報発信は他力本願ではいけない。地域サイド、旅館サイドが自ら行うべきである。消費者

は細かな情報を求めている。「鳥が鳴いた」とか「花が咲いた」とか、地域や旅館情報を事細かに発信すべきである。間違いを恐れるマイナスの態度ではなく、未来に向かってプラス思考で前に進みたいものである。

2. 珠洲温泉

(1) 珠洲温泉の現状

石川県珠洲市は能登半島の最先端に位置する。市制当時（1954年）は人口38,157人を数えたが、2013年8月末現在では16,356人に留まり、過疎化が一段と進展している。

珠洲市の温泉といえば、葎ヶ浦温泉が戦前から知られ、現在ランプの宿が1軒宿で経営を行っている。第2次世界大戦後、1950年後半において珠洲市では宝立町鶴飼で温泉開発が行われ、その第1号源泉は1958年の開発である。当時、数カ所で温泉開発が行われ、民宿などに分湯されたが、能登半島の観光ブームの停滞や後継者問題で民宿の廃業が相次ぎ、珠洲温泉の存在は忘れ去られたのである。

珠洲市の温泉は、2013年現在、狼煙（料理旅館）・葎ヶ浦（高級和風旅館）・鉢ヶ崎（日帰り温泉施設）・飯田わくわく広場（足湯）・鶴飼（国民宿舎・料理旅館・料理民宿・銭湯）で確認出来る。つまり、5地区に8カ所の温泉施設が点在している。

こうした温泉施設だが、葎ヶ浦温泉の場合はよしが浦温泉ランプの宿として知名度は抜群だが、他の温泉施設は無名に近い。観光パンフレットにもあまり紹介されず、宝の持ち腐れの状態となっている。泉温が低い沸かし湯なので、品質の保証は出来ないという一部に真面目な意見もあるが、温泉先進国日本とはいえ、品質の保証が出来る温泉地は全国にどの程度存在するであろうか。

こうした中で、珠洲市の活性化の一助として、珠洲市における温泉の活性化の取り組みを検討した結果、珠洲温泉銭湯道の企画が誕生したのである。

(2) 珠洲温泉銭湯道

① 珠洲温泉銭湯道の背景

珠洲温泉銭湯道（通称・珠洲温銭道）とは、簡単に言えば、奥能登・珠洲市に位置する温泉施設と宿泊施設、そして銭湯などを巡るスタンプラリーのことである（浦 2013b）。温泉道のルーツは、2001年3月25日、別府温泉でスタートした温泉巡りのスタンプラリーである。予め指定された温泉施設（外湯・温泉旅館など）を88カ所巡って、満願の際に温泉道名人の称号が表彰で与えられ、特製の温泉タオルが進呈される。温泉道名人になると、顔写真が温泉殿堂（別府市鉄輪温泉のひょうたん温泉）で永遠に掲載され、名誉を称えられることになる。別府八湯温泉道名人は、この12年間で4,389人（2013年3月末現在）を数え、全国から温泉マニアやファンが集まり、温泉道を楽しんでいる。

ところで、別府八湯温泉道のシステムは、北海道温泉巡りスタンプラリー・紀泉温泉修験道・九州温泉道などに波及し、その効果は計り知れない。さらに、東京では銭湯お遍路という企画がある。東京都浴場組合の主催で、加盟している約750軒（2012年5月現在）の銭湯を巡るスタンプラリーである。

半島や島嶼に位置する観光地は、一生に一度訪問すれば良いという、いわゆる「観光地」と思われがちだが、半島や島嶼は自然環境に満ち溢れており、年に何回も訪問する、いわゆる「リゾート」の方向性が見い出される。珠洲市には銭湯を含めて多彩な温泉施設が点在してお

り、年に何回となく訪問することで、奥能登・珠洲市が真の「リゾート」として定着することを祈念してこの企画が誕生した。

②スタンプラリー

珠洲温泉銭道は、参加者が温泉施設や銭湯など予め指定された珠洲市内の各施設を訪問し、入湯することによって、施設のスタンプ（印鑑）を押印する。そして、8種のスタンプが揃えば「珠洲温泉銭湯道名人」となり、認定証による表彰がある。別府八湯温泉道では88種のスタンプで名人となるが、珠洲温泉銭道では8種のスタンプで「名人」、11巡することで「銘人」として表彰を行う。この銘人制度は珠洲温泉銭湯道の特色となる。対象は全国の温泉ファン・銭湯ファン・温泉マニア・銭湯マニア・スローライフ・トレッキング・ハイキングの好きな方・県内外の観光客などである。

参加者は「珠洲温泉銭湯道スタンプ帳」（頒価100円）をNPO法人能登すずなりの事務局（受付）で購入することで、入門が認められる。名人及び銘人の認定者は認定料をそれぞれ2,000円支払うことで、認定証の発行が行われ、記念品としての刺繍文字入りの110cmのロングタオルが進呈される。タオルは大阪府熊取町産の泉州タオルで、名人タオルの文字（珠洲温泉銭湯道名人）は珠洲市の色である赤色で、銘人の場合は紫色の文字となる。

主催は珠洲温泉銭湯道実行委員会、問い合わせ先はNPO法人能登すずなり（道の駅すずなり）で、共催はNPO法人能登すずなり・大阪観光学大学温泉愛好会・別府八湯温泉道名人会・温泉観光実践士会九州支部、後援は大阪観光学大学観光学研究所となる。温泉愛好会では珠洲温泉銭道のブログ、温泉観光実践士会九州支部ではHPの運営・管理を行っている。

珠洲温泉銭道は2013年6月14日に記者発表を行い（写真3）、露天風呂の日である6月26日にスタートした。初代名人（名古屋市在住）は8月11日に誕生し、8月19日には4人家族（兵庫県在住）が名人となった。別府八湯温泉道は湯が枯れるまでの企画であり、珠洲温泉銭道も同様の企画としたい。

③対象施設

対象施設は温泉施設に限りがあり、個性的な風呂を持つ旅館や民宿・銭湯も対象施設とした。当初、灯りの宿まつだ荘（料理民宿）・飯田わくわく広場足湯（温泉足湯）・恵比寿湯（銭湯）・海浜あみだ湯（銭湯）・すずの湯（日帰り温泉施設）・宝湯（温泉銭湯）（写真4）・能登観光ホテル（料理旅館）・のとじ荘（温泉国民宿舎）・狼煙館（温泉料理旅館）の9施設でス



写真3 珠洲温泉銭湯道の記者発表
（飯田わくわく広場足湯）



写真4 温泉銭湯（宝湯の男風呂）

ターゲットした。その後、9月11日までに二島旅館（温泉料理旅館）・ランプの宿（温泉高級和風旅館）が対象施設となった。その他に某飲食店では海水を利用した足湯を計画している。

宿泊施設は人出不足もあって宿泊のみの対応である。したがって、2泊3日の旅程が余儀なくされており、今後の課題と言えよう。足湯が開設されれば、1泊2日での旅程も可能であり、関係者の努力が待たれよう。

Ⅳ リゾートとしての温泉地（むすびにかえて）

1. 温泉地の輪廻

山村順次は長年にわたる一連の研究によって、日本の温泉地は、湯治場（療養温泉地）⇒保養温泉地⇒観光温泉地⇒温泉観光都市と成長すると理論付けた（山村 1998）。江戸時代から現代に至るまでの温泉地の発達過程を示したものだが、バブル経済崩壊後、観光温泉地（例えば鬼怒川や石和など）や温泉観光都市（例えば熱海や別府など）の状況が一段と厳しい。いずれも温泉旅館の廃業・転業が著しい地域である。

一方、都市学の研究では都市輪廻説があつて、最後は衰退・崩壊に至る都市が登場するという理論がある（服部編 2011）。まさに、2013年7月に破産を申請した米国の工業都市・デトロイトがその実例かも知れない。

筆者は、欧州型の保養温泉地が今後の日本の温泉地の方向性を示すものと確信している。かつての湯治場のように長期滞在をしながら、休養や静養・英気を養う新しいタイプの温泉地である。いわゆる観光の宿泊拠点ではなく、生活や気分転換の滞在拠点を指すのである。言葉を変えれば、リゾート型の温泉地である。リゾートの語源には「しばしば行く」があり、せめて年に4回、四季ごとに温泉地へ行く仕組みを作り出すことである。

観光温泉や歓楽温泉を克服することで、新しいタイプの持続可能な保養温泉地を目指したい。筆者は欧州型の保養温泉地を今後の方向性として示したが、模倣ではなく、日本型の保養温泉地にしなければならない。

大前提はかつての湯治場（療養温泉）型の保養温泉地だが、静養・保養・滋養の3養を主体とした温泉地づくりを行いたい。日本の湯治場は共同湯を中心に発達したが、大切なものは温泉地の核となる共同湯である。石川県の温泉は、中心部に「総湯」と呼ばれる共同温泉があり、地域社会の社交場として成立している。

温泉公園・遊歩道の整備はもちろんのことだが、「歩いて楽しいまちづくり」も大切である。食堂・土産品店・理美容店・クリーニング店・マッサージ店など、ロングステイの際に利用されると思われる施設の存在が求められる。

2. ロングステイと滞在メニュー

現在の日本人には、ロングステイ、つまり長期滞在は馴染めないが、湯治場での生活はロングステイが主体だった。21世紀に入って少子高齢化が顕在化した。一方、湯治場を支えた農民が減少し、さらに高齢化することで、ロングステイを楽しむ習慣は徐々に減少した。また、サラリーマンの場合は、勤務の状態とか休暇制度の不備で、ロングステイはいまだに難しい。しかし、第一線を退いた高齢者はロングステイが可能であり、これからは特に団塊の世代をターゲットにしたい。

ロングステイには宿泊施設の充実が欠かせない。温泉地は相変わらず温泉旅館が主体だが、別府温泉の場合は古くから貸間旅館（湯治宿）が発達し、近年ではゲストハウス、そしてB&Bに対応する温泉旅館が登場し、ロングステイに対応しつつある。そのため、少なくとも4泊5日のロングステイが可能な料金設定を行いたい。

4泊する場合、温泉地サイドで問題が生ずる。湯治場では静養と温泉浴が主体だが、それとて、癒やしや健康を求めて散策や温泉巡りの行動があった。4日間何をするか、消費者側に任せるのではなく、温泉地サイドで4日間の過ごし方を提案すべきである。別府市ではいわゆる別府八湯で路地裏散歩が行われ、八湯回るだけで8日間要することになる。さらに、温泉好きだと、2001年3月にはじまった別府八湯温泉道（スタンプラリー）のイベントに参加することも一興である。

市民対象の公民館講座の受講、そして各種イベント（オンパク・混浴温泉世界・アルゲリッチ音楽祭など）への参加、まち歩きなどを考慮すると、4泊では少ないかもしれない。さらに、トリ天や冷麺などB級グルメも充実している。まち歩きではボランティアガイドの活用となるが、将来的にはガイドは有料化が好ましい。

3. スロートーリズム

今後の温泉地の方向性はロングステイだが、その考え方の根底には、スロートーリズムの精神が流れていると思われる。高度経済成長期のような忙しいアクセク観光ではなく、1カ所に滞在してノンビリと過ごす観光である。スローフード、つまり地産地消の食材を活かした料理や、地域の自然・歴史・産業・文化など地域の個性に触れるスローライフを楽しむパターンである。

由布院や黒川は地域資源を活かした「まちづかい」によって、温泉地の再生を果たしている。由布院はのどかな田園風景、黒川は平凡な山の風景などを活用し、温泉地再生につなげている。こうした地域資源はまさにスロートーリズムの基本となろう。温泉地の中核は温泉施設と温泉旅館となるが、これらにプラスする形で、地域資源を有効に活かすことが今後の課題となろう。温泉プラス α 、その α の部分が消費者から今後さらに求められよう。

参考文献（発行順）

- 山村順次（1998）『新版・日本の温泉地 その発達・現状とあり方』日本温泉協会、カラー口絵8頁、本文239頁。
- 浦 達雄（2006）『別府温泉郷の観光地域形成に関する研究』クリエイツ、218頁。
- 布山裕一（2009）『温泉観光の実証的研究』お茶の水書房、339頁。
- 服部銈二郎編著（2011）『現代日本の地域研究』古今書院、188頁。
- 浦 達雄（2010）「温泉地全体が一つの旅館をコンセプトに－熊本県黒川温泉－」観光研究22-1、12～16頁。
- 浦 達雄（2012）「温泉旅館の活性化」観光研究論集（大阪観光大学観光学研究所・年報）・第11号、1～9頁。
- 温泉観光実践士養成講座実行委員会編（2013）『温泉の正しい理解と温泉地の活性化－第4改訂版－』大阪観光大学観光学研究所、112頁。
- 浦 達雄（2013 a）「和倉温泉の活性化－スロートーリズムで活路開拓－（不易流行（11）」日本温泉協会、第81巻5号、24～25頁。
- 浦 達雄（2013 b）「珠洲温泉銭湯道の意義と課題（温泉地情報）」日本温泉地域学会、第21号、38

～39頁。

注

- 1) 環境省のHPによる。http://www.env.go.jp/nature/onsen/data/riyou_nendo.pdf